

こころ日記「ぼちぼち」 その④

戦後生まれ

今年が戦後80年と言われ、メディアは戦争をテーマにしたものを多く取り上げている。もう「戦後」という言葉は死語だと言う人もいる。歴史の域に入っているとも。

自身は戦後8年後に生まれだが、幼かった頃を思い出すと、周りに戦争の跡を感じるものはほとんどなかった。昭和20年からの日本の戦後復興は、すさまじい勢いと速さで進んでいったのだろうと思う。

戦争を身近に感じたのは、父が40代にして出征したと聞いたことだ。九州の南端から戦地に向かう寸前に終戦を迎えたので、戦地には行かずにすんだ。おそらく南方の激戦地に行ったに違いない。死を覚悟した父は、やれやれとでも思っただろうか。

「鉄砲も持たされず食料もなく、勝つわけがないと思いよった」とお酒が入るとよく言っていたのを思い出す。

我が家は、兄弟親戚、父の友人などが集まりよく宴会をしていた。近くにあった京都大学の学生を下宿させていたこともあり、人の出入りが頻繁だった。若い人達を交えての宴会は、必ず先の戦争が話題になった。白熱してくると、政治の話から日本国のあり方まで議論が始まる。難しい話だったが、大人たちの会話の時間が何より面白かったのを覚えている。戦争のリアルさを教えてくれたのは、家族や戦時下に暮らしていた身近な人達だった。

家以外で戦争があったのだと感じたのは、近くの神社の祭りに行ったときこと。傷痍軍人と言われた人が、軍歌を流しながら物乞いをする姿を見た時だった。何となく怖さを見てはいけけないものを見てしまったという感覚に襲われ、思わず父親に「あの人、何してはんの？」と尋ねたことがある。父は顔を曇らせただけで、何も答えてはくれなかった。学生のころまでそのような人を時々見かけることがあったが、ようやく戦争と結び付けて考えられるようになった。

高度経済成長の中、戦争を語る人が少なかったが、今ようやく「語り継ぐ」ことが注目されている。

そういえば小学生の頃、戦争を経験していた先生が多くいたと思うが、私たちに戦争についての話をしたことがあっただろうか。

国語の教科書には、戦争をテーマにした教材はあったが、具体的に戦争の悲惨さや被害など、教員の口から聞いたことはなかった。あえて口にしないという暗黙の雰囲気があったのか。戦中の軍国教育と戦後の教育との隔たりに、教員を辞した人も多かったと聞く。思春期の頃、「戦争を知らない子どもたち」という歌をよく口ずさんだが、戦争のことは何も知らないし、知らされてもないなあと思ったのを覚えている。

あの頃の教員は、様々な権利を獲得するために労働運動にも邁進していた。5月1日のメーデーには、ほとんどの先生はいなくなっていた。子どもたちは、「先生行ってらっしゃい！」

と見送り、その間は、静かに自主学習。先生たちは、私たちのために頑張っているのだと思っていた。当時の教員は、戦後の教育に何を期待し、頑張ろうとしていたのか思いを馳せたくなる。

戦中・戦後の産めよ増やせよ政策によって、私より5つくらい上は団塊世代と言われている。その余波で、私たちの世代も学級数が多く、学級は50人くらいだろうか。とにかく子どもがうじゃうじゃいて、学校は私にとって落ち着く場所ではなかった。

何よりいやだったのは、私は集団行動が苦手だったので、要領が悪くよく叱られたことだ。体育時の行進の足並み、集会での並び方などなど、皆と揃えて活動することの苦痛、不満ばかりだったように思う。

修学旅行の時、トイレに行って戻ったら、すでに皇居前での集合写真の撮影が終わっていたということもあった。その当時は、一人くらいいなくても問題にならなかったのだら

う。私もあえて「写っていません」とは言えなかった。

学習の中でも、例えば絵を描くとき、肌色は朱色と白と決められていたが、なぜか納得できなかった。人によって肌の色は違うぞ。友だちの顔を描いた私の絵だけが、茶色系になっていた。決められた色を使わなかった私を、担任は稀有な目を見たのを忘れない。

未っ子でもあり、大人の中で育ったせいか、同年の子どもたちとはあまり話が合わなかったし、ちょっと大人を舐めたような態度は、先生から嫌われる要因だったのかなと思う。

当時の教員は今とは違う大変さがあった。プリント一枚一枚すべて手書きのガリ版印刷で、時間がない時は子どもたちにも声がかかり、職員室で、インクまみれになりながら手伝ったりもした。だからプリントはとても貴重だった。

2年生の時、私は学校の帰り道、溝のタニシに夢中になり、紐で綴じた九九表をうっかり忘れてしまった。慌てて探しに戻ったが見つからなかった。先生からは厳しく叱られ、再度プリントをもらうことは叶わなかった。泣く泣く家で九九表を作った。それがあったから、九九が覚えられた。怪我の功名とはこのことだろうか。

小学校時代のエピソードはいっぱいあるが、振り返ると常に雑に扱われていたなと思う。

大勢の中で目立たぬように悪いこともしたし、危険な目にも遭った。褒めてももらえなかったけれど、自分のことは自分で何とかする、できる力をつけてもらったと思う。

変わらない学校

今年、久しぶりに小学校で働く機会を得た。学習支援員として困った子に声をかける仕事だ。私が育った学校、現役で働いていた頃からすると学校は変化しているが、変わらないこともたくさんあることに気づく。

子どもが減っているというのに、学級の人数は、相変わらず35人以上。現役だったころ、一クラス20人なら毎日全員に声をかけ

ることができるのと思ったものだ。一日の終わりに、今日は〇〇さんいたかな、何をしていたかなと振り返ることが多かった。

子どもの体は大きく成長しているのに、教室の大きさは変わらない。教科書はすべてA4判になり、机の上にちゃんと置けずはみ出している。しかも今IT化が進み、全児童生徒にクロムブックが持たされているので、筆箱とノートを置くと、机上は混雑極まりない。タブレットは本当に必要なのかと疑問を持つ。

学校内には、実に決まりごとが多いと改めて思う。廊下は走らない、曲がり角の飛び出し坊やのイラスト。階段一つ一つに全国都道府県名が貼られ、知識のオンパレード。それに加え、学校目標、行事のスローガン。子どもたちへの頑張れのメッセージが満ち溢れている壁面に、疲れてしまう。

驚いたこともある。教室掲示の子どもたちの絵画が、同じ構図、同じ色の作品ばかりなことだ。肌色を正しく描けなかった昔の私を思い出した。誰も疑問に思わずに、あっち向いてホイ！と言えば、みんな同じ方を向き同じことをする、させる教育なのだ。私もそんな教育の一旦を担っていたのだと思うと、過去を猛省する。

日本の子どもたちは、ノーと言うことが苦手だ。そして自己肯定感も低いと言われる。

子どもの人権を考えると、教育を変えない限り社会は変わらないと思った。

つつく